

★『ほおじろ』読者参加版をお届けします。この紙面の主役は読者の皆さま。ご投稿いただいた原稿を中心に、耳寄りな情報を加えてお届けしてまいります。ジャンルを問わず、皆さまからのご投稿大歓迎です！以下のエヌ・アイ・エス広報部宛ご投稿ください。お待ちしております！

(株)エヌ・アイ・エス
広報部

TEL 047-498-4838
FAX 047-498-4839
千葉県白井市根 116-32
川上ビル 202
E-mail: nis@shiroi-nis.com

今回は、富士にお住まいの大山さんが綴る少年時代の思い出・続編、併せて清水口の南さんからいただいた投稿を、ご紹介いたします。

投稿

大山康郎 (富士)

松阪が好きになった

母のいとこが経営する松阪の運送会社での毎日は、家族で暮らしていた伊勢とは大きくちがうようになった。身の回りに、会社で仕事をする三十人ほどの大人がいるようになったのです。

母は、会社の食堂でその人たちの食事を作ったり、事務所の掃除などしたりして大変忙しいようでした。そんな母を見ていたので、学校から帰ると七輪で湯を沸かし、井戸端で食器洗う母に水汲みをして手伝った。

会社の人たちは時間がたつにつれて私たち母子に親切にしてくれるようになった。中でも井宮さんという青年が私を弟のようにかわいがってくれた。井宮さんは、松阪の中心部から四きほど離れた丹生寺町のお寺の息子さんでした。

私のことを「康ちゃん」といって松阪のことをいろいろ教えてくれた。松阪城が浦生氏郷により作られたことを知り、休みの日には弁当、水筒を持って城跡や本居宣長のお墓がある山室という所、三井財閥の三井家の跡、門だけ残っている場所などに、自転車で連れていってくれた。

その時、松阪は商人の街で三井家などは近江の国の日野より来たかと教わった。伊勢には神宮がありました。松阪は商人の町で、私は、大好きになりました。



待ちにまつた 写生大会

転校したあと、待ちにまつた日が来ました。写生大会です。

松阪市立第一小学校ではそのころ、初夏と秋に写生大会が行われていました。六月の写生大会は松阪城址公園。五年生全員が参加して、後日講堂で作品展をするのです。

写生大会の日。お母さんが用意してくれた弁当と、松阪への転校前の伊勢市の小学校で友だちだった、稔君のお父さんが作ってくれた画版に画用紙を画鋏で貼り、いつも使っているサクラクレパス十二色のケースを肩からさげる布カバンに入れ、家を出ました。

外はすばらしい青空です。お母さんは、私がいつもより元気なので「今日は天気もいいから、思いきり描きなア」と言ってくれた。

「うん」お母さんが「思いきり描きな」と言うたことを思い浮かべながら歩いているうちに、公園についた。

「お早うございます」挨拶すると担任の岩出先生が「大山君の挨拶は元気がいいなあ」とほめてくれた。先生は全員に聞こえるように大きな声で「危ないからサクの外にいかない。木に登らない。昼食の弁当を食べたあとのゴミは持って帰ること」と話した。

最後に「良い作品を描いて下さい」との言葉があり、私たちは「はい」と言ってお腹いっぱい、写生する場所に移って行った。

何を描くか。

私は以前から、藤棚の下に美しく垂れ下がっている、一筋を超える藤の花の間から見る青空を描くことに決めていた。家の近くの道路で靴磨きをしていたおじさんの話だと、花が終ると、お礼に藤の根元に酒をあげるらしい。そんなことを思い出しながら画用紙にクレパスを走らせた。

花を見て描いていると、前の学校で仲良くしていた稔君や隆史君、はる先生。別れて暮らす弟や妹達の顔が目につかんできた。垂れ下がった藤の花を、この花は、はる先生、これは隆史君と違って絵を描いた。空も神宮の森の空と同じように、画用紙のすみずみまで力いっぱい色を塗った。

母が「思いきり描きな」と言った通りの絵が完成した。

岩出先生の講評

写生大会が日曜日だったので、次の月曜日はお休み。先生に「家で絵の仕上げをするように」と言われているので、絵をもち帰り、作品を壁にかけ三メートルぐらいさがって何度も見ました。自分の描きたかった思いが表現できているかどうかを考えながら、藤の花に赤い色、白い色、紫色を塗り込んだ。近く

文章あれこれ ⑨

高山修一



駆け出し記者のころ、先輩記者が東大法学部教授からのちに最高裁判事になる伊藤正己先生を電話取材して、談話記事を書いた。質問し、先生が話した通りに書いたら、どこからどうみても見事な完全原稿。電話で読み上げ確認してもらったら「はい結構です」。

「話しているように書けばいい」という人がいる。ところが、伊藤先生のようない「話」完全原稿は例外中の例外。話し言葉と書き言葉は違う。話していることをそのまま再現して、深みのあるいい文章になる人はなかなか

にある花、遠くの花がわかるか、また、光りのあたりぐあいはどうかを考え、影をつけると絵に立体感が出てきました。転校前の伊勢市の小学校の、なつかしいはる先生や隆史君、稔君、母という私と離れ、父と暮らす弟や姉を思って花に色をつけて完成にしました。

火曜日。絵をもって登校、皆で机の上の作品を見ながら写生大会の話で盛り上がっていました。授業開始の鐘と同時に岩出先生が教室に来ました。

「席に着いて、お早うございます」。級長の号令で着席します。

岩出先生は「一時間目の授業は、皆さんの作品を全員で見ながら先生が講評します。黒板に絵を並べて下さい」と指示します。作品をクリップで厚紙にとめて黒板に立てかけ、五人ずつ黒板の前に並べました。

先生が「力強く描けていますね」「色がきれいですね」と講評してくれました。私の番が来ました。

先生は「皆と同じように良く描けていますね。少し間をおいて色を多く使っていますね、藤の花を描いた人は他にもいますが、ほとんどの人は紫色です。この絵は違いますね、色々な思いを込めて描いているのがわかりますね」と話して

いない。

話だけならちゃんとしていて、それなりに面白いのに、文章となると手が止まる。「新聞話者」もまれにいる。入社間もないそんな若者にいったのが「いましゃべった話を粗々に下書きして、それをもとに推敲して再構成し、足りないデータを加えて書き直せ」。

話し言葉と書き言葉の間に「下書き」という手間は増えるが「思っているけどうまく書けない」という人にはこの方法がお勧め。思いついた話をざっくり書いて、声を出して読む。足りない言葉や言い回し、構成を改め、誤字脱字を確かめる。「推敲」だ。ひと手間加え、立ち止まって考えることで、心を人に上手に伝えることができる。文章を書くことが楽しくなるだろう。

くれました。

四十七人全員の講評が終わりました。先生の説明では、夏休み前に講堂で全校の展覧会が行われ、父兄や教育委員会の人たちも見にくるという。

「各クラスから十点を選んで出展します」。十クラスで計百点。「このクラスから優秀作品が出ることを楽しみにしています」と岩出先生。

今日の先生の講評では、全員がほめられ、誰の絵が展覧会に出品されるかわかりません。七月にある展覧会が楽しみです。(続く)

投稿

南 峯子 (清水口)

「しろい健寿会の集い」に参加して

高山修一さんの新聞講座「新聞の楽しみ方&活用術」の前回(10月21日)講座の折「しろい健寿会の集い」のお話があったので行ってきました。

基調講演「認知症について」は、日頃の認知症についての知識を自分なりに整理することができました。

「朗年の主張コンサート」では、新聞講座の受講生・大山康郎さんが「私の認知症対策」で朝日新聞を毎日書き写していることを話されました。発表者の皆さんは決められた時間内で、理路整然と大きな声でしっかりと主張されていました。すごいなあと感じるばかりです。

ユーカリアンサンブルの演奏会は、久しぶりに生の楽器の演奏を聞いて良かったです。私は、楽器が演奏できませんが、もし、何か楽器が演奏できたら毎日の生活が、もっと楽しく過ごせるだろうと、とつてもうらやましく思いました。

第一部の式典には、白井市長、教育長、市議会副議長、そして大勢の市議会議員が出席していました。白井市にとって、老人問題が大きな問題なのだ改めて考えました。

「健寿の集い」には初めて参加でしたが、来年の「朗年の主張」はどんなテーマなのか、楽しみです。